

ブラジルの金利引き上げについて

2013年10月11日

ブラジル中央銀行は10月9日(現地時間)の金融政策委員会において全員一致で政策金利の0.5%の引き上げを決めました。これで同国の政策金利(Selic)は9.5%となりました。4月以降5会合連続の利上げとなりました。今回の利上げについては多くの市場関係者が予想していたことから、金融、為替市場での影響はみられませんでした。

《政策金利引き上げの背景》

実施の背景には引き続き①インフレ抑制、②自国通貨の安定が挙げられます。

- ① ブラジルでは、自国通貨安による輸入物価の高止まりやインフラ整備を中心とした財政支出の拡張によりインフレ率が恒常的に高い水準にあります。直近の中央銀行が指標とするインフレ率(IPCA前年比)は9月が5.86%と前月からは低下していますが、前年の9月(5.28%)を上回っています。同行の目標とするインフレ率(4.5%±2%)の範囲内に収束していますが、依然高い水準であるといえ、予防的利上げに踏み切ったと考えられます。
- ② ブラジルレアルは米国QE3の縮小開始観測が広がり始めた5月下旬から8月中旬にかけてドルなどの主要通貨に対して大幅に下落しましたが、予想されていた9月に同縮小開始が見送られたことや大規模市場介入を中心とする通貨防衛策が発表されたこともあり、その後は反発し10月に入っても強含みに推移しています。

ただ同国では経常赤字を直接投資や証券投資資金の流入でファイナンスしており、証券投資資金の流入を促すため金利を高くしさらに通貨の安定を図りたいとの考えもあるようです。

《今後の見通し》

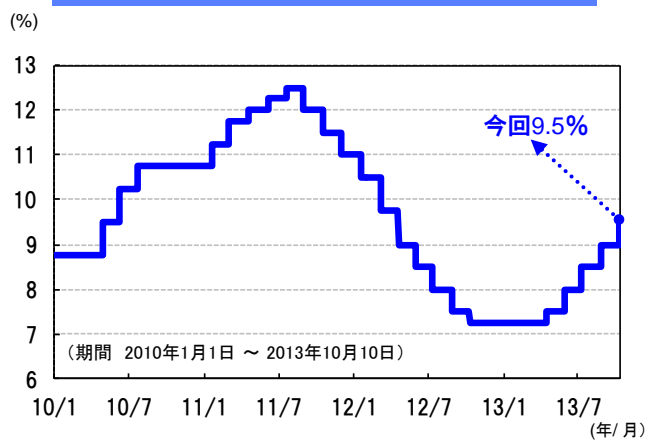
景気については、ブラジルの潜在成長率は+3.5%程度とされています。IMF(World Economic Outlook October 2013)では同国成長率を2013年は+2.5%(±0% 前回7月公表値比)、2014年は+2.5%(同-0.7%)と潜在成長率を下回る見通しとしています。外部環境をみると経済的な結びつきの強い中国の経済指標にも底入れ、もしくは改善がみられ、低迷が続いた欧州でも景気底入れの兆候がみられます。ただ両者とも急回復は望めず、ブラジルの景気回復も緩やかなペースにとどまると考えられます。インフレについても4月以降に金融引き締めに転じた効果がみられ始めており、金融政策委員会では今回の利上げ効果もありインフレ率の低下は来年まで続くであろうとしています。

為替レートについては足下では通貨防衛策、利上げ、証券投資資金の流入増加傾向などから堅調ですが、米国の財政問題、金融政策を巡る先行きの不透明感もあり、状況によっては安全資産選好の動きが強まることも予想されます。

当社でも引き続き同国に関わる市況動向を注視してまいります。

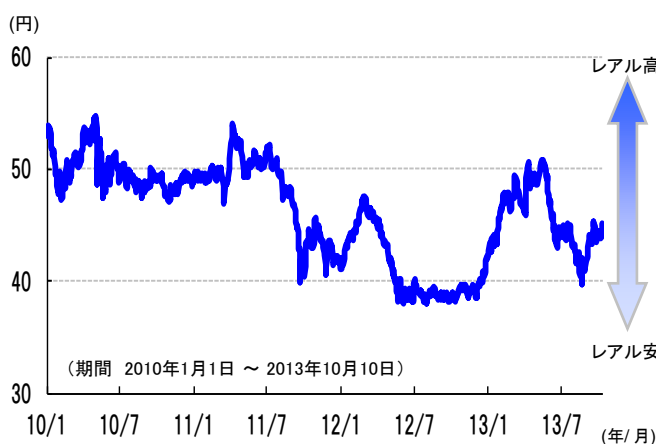
- 当資料は、明治安田アセットマネジメント株式会社がお客さまの投資判断の参考となる情報提供を目的として作成したものであり、投資勧誘を目的とするものではありません。また、法令にもとづく開示書類(目論見書等)ではありません。当資料は当社の個々のファンドの運用に影響を与えるものではありません。
- 当資料は、信頼できると判断した情報等にもとづき作成していますが、内容の正確性、完全性を保証するものではありません。
- 当資料の内容は作成日における当社の判断であり、将来の運用成果を示唆あるいは保証するものではありません。また予告なしに変更することもあります。
- 投資に関する最終的な決定は、お客さま自身の判断でなさるようお願いいたします。

《ブラジルの政策金利》



出所：Bloombergより明治安田アセットマネジメント作成

《ブラジルレアルの対円推移》



出所：Bloombergより明治安田アセットマネジメント作成